

阿倍野筋北遺跡発掘調査（AS07-1次）現地説明会資料

2007年10月27日（土）

大阪市教育委員会

財団法人 大阪市文化財協会

はじめに

大阪市教育委員会と（財）大阪市文化財協会は、2007年6月から大阪市阿倍野区阿倍野筋一丁目において阿倍野再開発事業に伴う発掘調査を実施してきました。

阿倍野筋北遺跡は、JR天王寺駅の南方に位置する古墳時代から中世の集落遺跡です。南東には、阿倍氏の氏寺の可能性のある阿倍寺推定地が存在します。

今回の調査は、北・中央・南の三箇所に調査区を設定して行いました（図1）。北調査区と南調査区は高台に位置し、中央調査区周辺の現在の地形は西に開く谷となっています。中央調査区は南北両調査区の地表面に比べて約3m低くなっており、谷の中央部分に位置します。中央調査区の流路から卒塔婆が多数出土しました。

調査の結果（図2）

調査区の南半部で流路203を検出しました。この流路は谷底をやや蛇行しながら東から西に流れ、その幅は4.5m前後で、深さは1.1～1.3mです。流路は、下から粗粒砂層・シルト層・細粒砂層が堆積して埋まっていました。

流路の中央付近の北岸から、15世紀末から16世紀初の卒塔婆が多数見つかりました。卒塔婆が含まれていたのはシルト層で、それらは折り重なり、密集して出土しました（写真1）。出土範囲は東西約5m、南北約2m位の範囲で、卒塔婆以外には自然木が出土しただけで他の木製品はありませんでした。

このような出土状況から、卒塔婆のみを一括して、川に流したものと推測されます。

卒塔婆は、小さな破片も含めて300点以上見つかりました。まだ整理の途中で接合関係を確認していませんが、卒塔婆は少なくとも100個体以上あると思われます。

流路203が埋まった後に井戸（SE204）が造られていました。この井戸は卒塔婆の出土地点に近接しており、その掘形からも卒塔婆が数点出土していることから、さらに多数の卒塔婆があったことが想定されます。また、同時期に存在した北側の土壌（SX206）からも卒塔婆が数点見つかりっていますが、これは流路があふれた際に、隣接する穴に流れ込んだためと考えられます。

卒塔婆の概要

卒塔婆は頭部を五輪塔形にし、下端は尖らせたものと直線的なものがあります。高さは70cm前後で幅は6～9cmです。また、厚さはばらつきがありますが、0.5cm前後のものが多いようです。

卒塔婆は、死者の追善供養のために建てられるもので、一面(表面)にはお経や真言の一節、供養の目的、供養される人の戒名、年月日などが記されています。もう一方の面(裏面)には、仏の名などが記されます。

今回出土した卒塔婆では墨書が残るものや、風化のため墨書の部分が浮き上がっているものが、30点以上ありました。

その内で一番遺存状況の良い卒塔婆(図3)は上部が欠けていましたが、以下のように書かれていました。

・× 一見卒塔婆 永離三悪道 奉為道金禅門一周忌善

根者也乃至法界平等利益了(= 畢)

× 造立者 必生安楽國 文龜二年十二月五日 敬白

・南無大勢至菩薩 梵字 [梵字]

表面の上部に左右に分かち書きされた文は、大日経の一節で、「一見卒塔婆 永離三悪道」「何況造立者 必生安楽國」です。これは「ひとたび卒塔婆を見れば、三悪道(地獄道・餓鬼道・畜生道)から永久に離れることができる。実際に建てたなら、必ず安楽国(極楽)に往生できる。」という意味になります。

その下の二行の文は「道金禅門の一周忌のための善根であるので、必ず等しく仏の利益を受けることができる」という意味で、左の行には文龜二(1502)年十二月五日と日付が書いてあります。

卒塔婆は、追善供養のために初七日から三十三回忌まで13本建てられますが、それぞれに本地仏が決められています。例えば一周忌は勢至菩薩、三回忌は阿弥陀如来、三十三回忌は虚空蔵菩薩です。この卒塔婆は一周忌の卒塔婆ですから、裏面に勢至菩薩の名が書かれ、その下に滅悪趣菩薩(三悪道にいる衆生を五力をもって救済する菩薩)の種子「ドバン」が梵字で書かれ、その下に終止符の梵字が書かれています。

この他に三回忌のための卒塔婆もあります。表面には、最上部に阿弥陀の種子である梵字「キリーク」が書かれ、中段には2行に分れ「光明遍照 十方世界」「念仏衆生 摂取不捨」、下段には3行に分れて「文龜三年」「為法界衆生仏」「年 月」とあります。裏面には梵字で「アミダブ」と書かれています。また、三七日・四七日と記されたものもあります。

以下、釈読できたものを総合的に見ると、人名については供養される禅門(禅尼)には道金のほかに、「道盛禅門」と記したものが3点、「妙圓(禅尼)」が2点あり、「祐盛」が1点あります。また、供養される側なのか施主なのか不明な「法印政弁」が1点あります。法印は僧侶もしくは儒者・仏師・医師などに授けられた称号で、仏師では最高位を示します。「法」字の前には「師」があるので、供養された人は位の高い仏師だった可能性があります。

年号が記されたものは10点あり、そのうち8点が文亀元～三(1501～1503)年で、他に明應年間(1492～1501)年が2点、文明三(1471)年が1点あります。そのうち「妙圓」には明應年間のものと文亀元年のものがあり、「妙圓」が同一人物であるとするこの期間にわたって追善供養が行われたことになるでしょう。

供養の文言としては、前述の「一見卒塔婆 永離三悪道 何況造立者 必生安楽國」のほかに「光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨」、「極重悪人 無他方便 唯称弥陀 得生××」と記されたものがあります。

梵字には、五輪塔部に五大種子を記すほか、種子や光明真言や浄土変の真言を記したものがあります。

一方、裏面には「南無大勢至菩薩」のほかに「南無阿弥陀仏」を漢字や梵字で記したのや「南無西方浄土」と記されたものがあります。

以上の卒塔婆の中には、表面が風化し、墨書があった部分のみが墨で守られ、風化せずに浮き上がって見えるものが多くあります。この風化は川に流され土中に埋もれる前に進んだもので、卒塔婆が一定の期間、風雨に晒されて墓に供えられていたことを示していると考えられます。

卒塔婆に書かれた人名や年月日が多様なことや、100点以上まとまってみつかったことから、今回出土した卒塔婆は、多くの墓に供えられたものが溜まってきたため、まとめて片付けられ、丁重に川に流されたものと考えられます。

まとめ

今回の卒塔婆の出土から、近くに墓地があったと考えられますが、調査地の小字は「西金塚」で、周辺にも「東金塚」、「塚原」など、「塚」に係わる小字があることはこれと関連する可能性があります(図4)。

中世の卒塔婆が出土した例は各地にあります。このようにまとまった数が1箇所から出土した例はなく、またその出土状況から卒塔婆の使用から片付けに至る一連のようすが類推できました。

寺院が墓地を管理するのは江戸時代以降とされていますが、今回の出土状況などからみて、15世紀末から16世紀初めの時期に卒塔婆をまとめて片付けるような墓地の管理が、村などによって行われたことがわかります。

これらの卒塔婆は、現代にもつながる初七日から三十三回忌までの追善供養の約500年前のようすを実物で示す貴重な資料といえます。また、比較的遺存状況がよく、内容が判明するものも多いと思われることから、今後さらに解読を進めることによって、中世の追善供養の具体的な様子がさらに解明されることが期待されます。

[用語解説]

卒塔婆(そとば)

追善供養のために墓に立てる上部を塔形にした細長い板。梵字・経文(偈文)・戒名などを記す。

十三仏信仰(じゅうさんぶつしんこう)

初七日から三十三回忌まで、十三回の追善供養を行う際に、冥府の裁判官である十王およびその後の審理を行う三王の本地仏の1尊ずつ異なる仏・菩薩をまつり、亡者の追善を祈る信仰。

種子(しゆじ)

仏・菩薩などをサンスクリット文字(梵字)の1字で象徴的に表示したもの。

真言(しんごん)

仏・菩薩に呼びかけて、功德を祈願する呪文。サンスクリット語をそのまま音写したもの。

光明真言(こうみょうしんごん)

この真言によって、亡者は光明に照らされ、地獄・餓鬼・畜生・修羅の苦しみをのがれることができるといわれる。

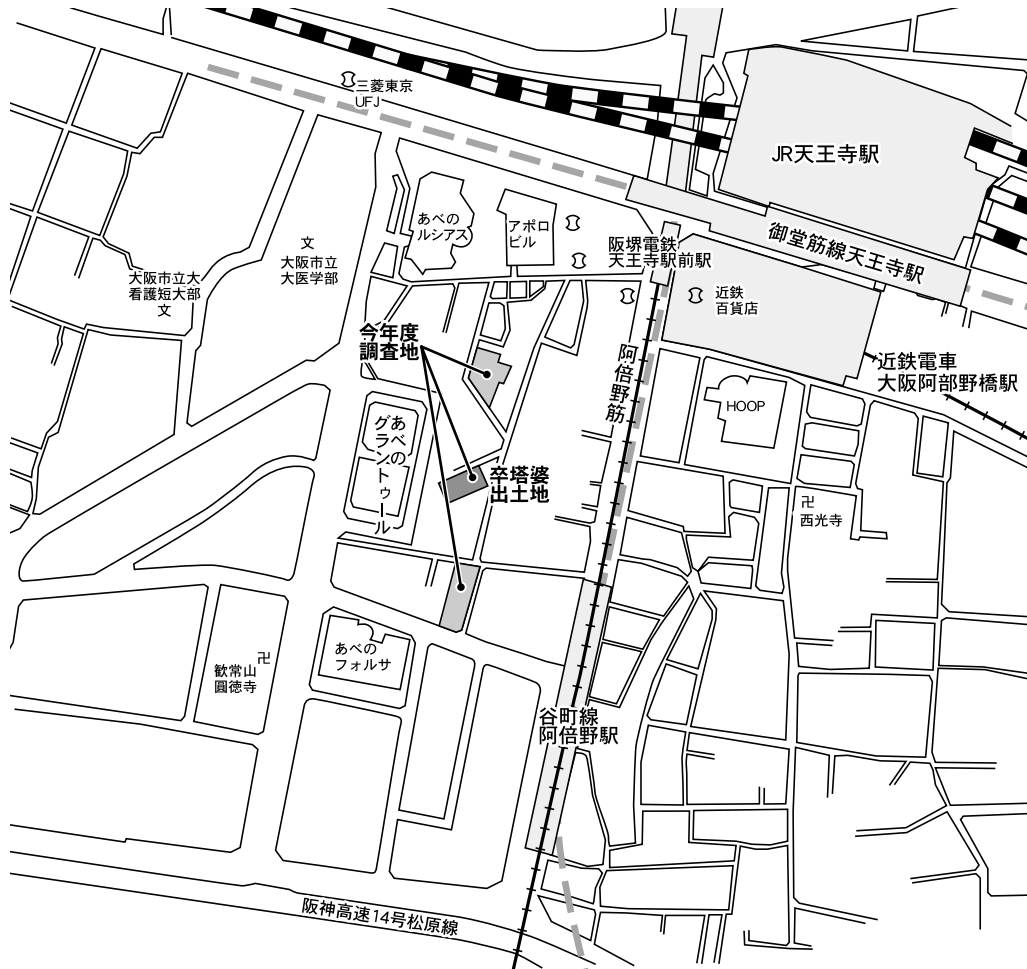


図1 調査地位置図

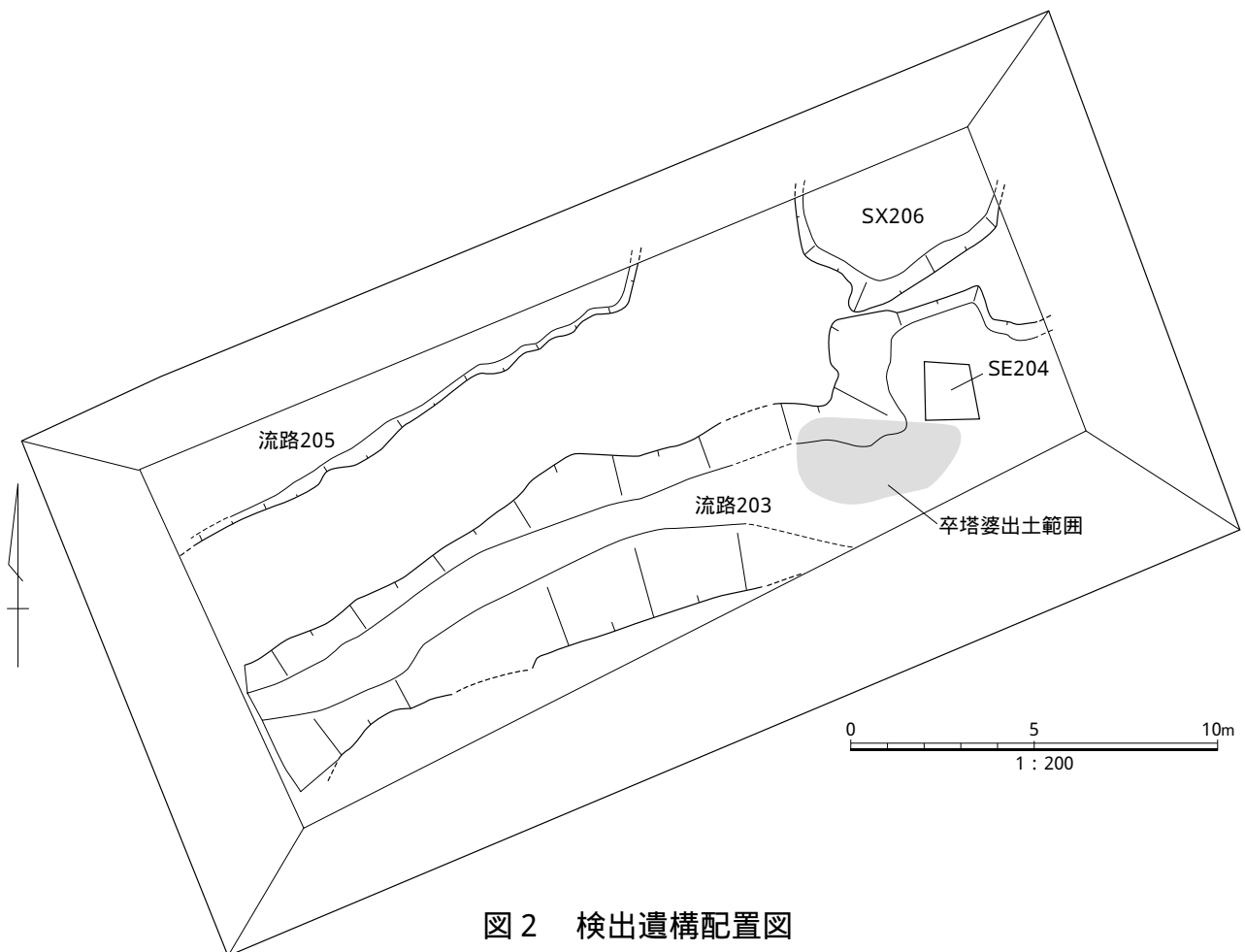


図2 検出遺構配置図

南無大勢至弁

・南 無 大 勢 至 「菩薩」 「梵字」 「梵字」

一見卒都婆永離三惡道
造立者必生安樂國

奉為道金禪門一周忌善
根者也乃至法界平等利益了
文龜二年十二月五日敬白

・(上部欠損)

×一見卒都婆 永離三惡道

×造立者 必生安樂國

奉為道金禪門一周忌善

根者也乃至法界平等利益了

文龜二年十二月五日 敬白

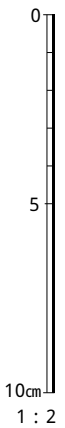


図3 卒塔婆実測図



写真1 卒塔婆の出土状況

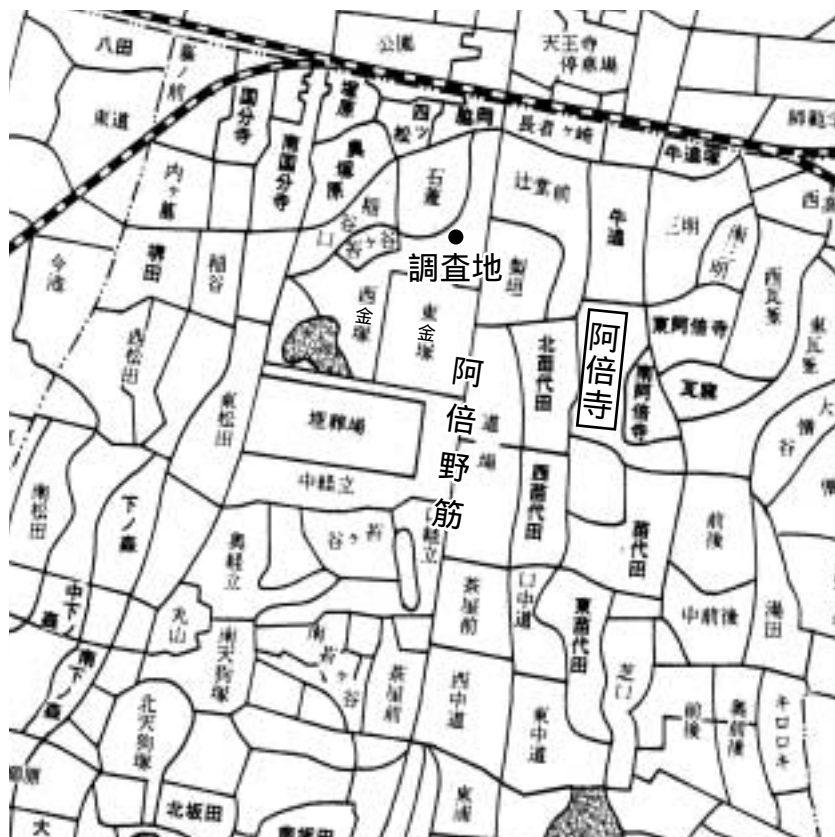


図4 調査地周辺の小字(「大阪の歴史」45より)

